

聖書：マタイ 26：17～30

説教題：聖餐の制定

日時：2020年7月19日（朝拝）

今日は朝拝に続いて総会を開催することになっていますので、なるべく説教は短く終わるように努めたいと思います。イエス様は 26 章 2 節で弟子たちにこのように言いました。「あなたがたも知っているとおおり、二日たつと過越の祭りになります。そして、人の子は十字架につけられるために引き渡されます。」 その過越の祭りの時がいよいよやって来ます。17 節で、種なしパンの祭りの最初の日に弟子たちがイエス様のところに来て言います。「過越の食事をなさるのに、どこに用意をしましょうか。」 過越の祭りは、ご存知のように、イスラエルがエジプトの奴隷状態から救い出されたことを記念する祭りで、ユダヤ最大の祭りでした。弟子たちはその祭りで定められている食事の時を持つためにイエス様に尋ねたのです。するとイエス様は 18 節で言われました。「都に入り、これこれの人のところに行って言いなさい。『わたしの時が近づいた。あなたのところで弟子たちと一緒に過越を祝いたい、と先生が言っております。』」 これは一体どういうことでしょうか。イエス様は弟子たちの知らない間に、ある人に頼んで会場の予約をしていたのでしょうか。後で弟子を遣わしたら、そこへ案内してくれるように前もって手はずを整えていたのでしょうか。恐らくそうであったと思われます。なぜイエス様はそうされたのでしょうか。それはイエス様は今回の過越の食事に特別な計画を持っていたからだと思われます。この後見ますように、それは一言で言えば聖餐の制定ということです。そのためにイエス様ご自身が入念な準備をされたのでしょうか。

それにしてもなぜ弟子たちにこれを黙っておく必要があったのでしょうか。それは前回最後に見たユダの裏切りと関係していたと思います。ユダは祭司長たちのところへ行き、イエス様を銀貨 30 枚で引き渡す約束をしました。ですから弟子たちに過越の食事の準備をしてもらったら、ユダにもそれが知られることになります。するとその場所へ祭司長らユダヤの当局者たちがイエス様を捕まえるために来るかもしれません。その結果、イエス様が大事なことを弟子たちに伝え、話そうとしたことがぶち壊しになってしまうかもしれません。そこでイエス様はこの準備のことを弟子たちの誰にも話していなかったと考えられます。ルカの福音書の平行記事を見ると、この準備のために遣わしたのはペテロとヨハネの二人だけでした。こうしてイエス様は敵に妨害されることなく、この大事な時を持つことができるように準備されたのです。こうして私たちはここにもすべ

ての状況を支配しておられたのはイエス様であったことを見るのです。

20 節以降には弟子たちとの過越の食事の場面が記されています。いわゆる最後の晩餐と呼ばれる時のことです。木曜日の夜で、翌日にはイエス様は十字架にかけられ、午後には息を引き取るという、その前日の夜の事です。その席上でイエス様は「まことに、あなたがたに言います。あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ります。」と言われました。これまでイエス様に戦いを挑み、敵対した人たちは沢山いました。その中の誰かがイエス様に手をかけようとするならまだしも、何とこの 12 人の中に裏切者がいるとイエス様は言われました。彼らにとっては非常に衝撃的な言葉だったでしょう。彼らはいへん悲しんで、代わる代わるイエス様に「主よ、まさか私ではないでしょう」と言い始めました。イエス様はさらに「わたしと一緒に手を鉢に浸した者がわたしを裏切ります」とも言われました。これはこれによって誰かを特定できるということではありません。みな同じ鉢から取って食べていました。ですからこれは同じ鉢から取る親しい者たちの中からという意味です。同じ釜の飯を食う者たちの中からということです。これはその裏切者の罪の重大さを告発するものです。

イエス様は 24 節で注目すべき言葉を語られます。人の子は、自分について書かれているとおりに去って行く。つまりイエス様の十字架の死は、聖書に預言されている通り、実行されます。しかしだからと言って裏切者の責任が軽くなるのではない。ここに神の主権と人間の責任における神秘があります。イエス様が十字架の死に至るのは神の御心です。しかしだからと言ってイエス様を裏切ったユダが良しとされるわけではありません。なぜかと言えば、それはユダがそれを神の御心と知り、敬虔な思いでしたのではないからです。彼は誰にも強制されることなく、自分の自由な意思によって、ただ彼自身の悪い心によってそれをします。ですからその責任は問われるのです。その人はわざわざいだとされています。そういう人は生まれて来なければ良かったのだと言われているのです。

そんな中、ユダが「先生、まさか私ではないでしょう」と尋ねました。他の弟子たちが尋ねる中、自分だけがそうしないのも不自然と感じたのでしょうか。彼はしらばっくられてイエス様に尋ねます。それに対してイエス様は「いや、そうだ」と言われました。ここは原文を直訳すると「あなたが言いました」という言い方になっています。これはこの後、26 章 64 節や 27 章 11 節にも出て来る表現です。おそらくこれはユダとの個人

的会話だったのでしょうか。あるいは他の人に聞こえても周りには良く分からないやり取りだったのでしょうか。しかしユダには分かったのです。イエス様はこの私が裏切者であることをすでに知っておられる。これはどんなに大きな衝撃だったのでしょうか。イエス様はその際、あなたが裏切者だ！と言ったのではなく、「あなたがそう言った」という言い方をもって、彼にその言葉を返しました。ユダが裏切者かどうかはユダ次第なのです。イエス様は裏切る者が誰かを知らないで裏切られたのではなく、すべてをご存知であられたのです。

26節以降には聖餐の制定のことが語られています。途中までは過越の食事の一部でした。イエス様は主人役を務める方として、パンを取り、神をほめたたえてこれを裂き、弟子たちに与えて「取って食べなさい」と言われました。ここまではいつもの過越の食事と同じです。しかしイエス様はここで「これはわたしのからだです」と言われました。このパンは裂かれて渡されたように、これは十字架上で裂かれるイエス様のからだを現すとされました。一方の杯も同じです。イエス様は杯を取り、感謝の祈りをささげた後、彼らに与えて「みな、この杯から飲みなさい」とお語りになったところまでは、いつもの過越の食事と同じでした。しかし続けて「これは多くの人のために、罪の赦しのために流される、わたしの契約の血です」と言われました。これはイエス様が十字架上で流される血を現すとされました。なぜイエス様は過越の食事の中でこのようなことを言われたのでしょうか。それはこの聖餐がこれまでの過越の食事にとって代わることを示すためです。先に触れたように、過越が現していたのは、神の民イスラエルのエジプトの奴隷状態からの救いでした。神の命令に従って一歳の傷のない子羊を屠り、その血を二本の門柱と鴨居に塗った家は神のさばきが過越しました。そして民は急いで出発するために、種を入れないで焼いたパンを食べました。この神の救いのみわざを過越の祭りは記念します。しかしこの過越はただ過去の出来事を記念するためのものではなく、神が将来与えてくださる本当の救いを指し示すものでもありました。それがこのイエス・キリストによる救いでした。旧約のイスラエルはエジプトの奴隷状態から救い出されましたが、それが指し示す神が将来与えてくださる本当の救いとは罪の奴隷状態からの救い、またサタンの支配からの救いでした。また旧約ではその救いのために傷のない子羊が屠られましたが、それが指し示す神が将来与えてくださる本当の犠牲とはイエス・キリストという犠牲でした。28節に「多くの人のために」という言葉がありますが、この意味は「多くの人を身代わりとして」ということです。キリストが十字架上でささげる犠牲は、この私の身代わりのためのものだったのだということを感じて信じ、そ

のことを現すパンと杯を受け取り、食し、飲む人は、言わばキリストと一体化されます。そしてキリストが備えてくださった救いを自分のものとして受け取り、その死の実りを豊かに受け取る者とされるのです。このキリストにこそ信頼を置き、キリストがもたらす恵みに生きる者となるように、主はこの聖餐を従来の過越に取って代わるものとしてここで定められたのです。

またイエス様の言葉の中で特に注目すべきは 28 節の「わたしの契約の血です」という言葉です。旧約以来、契約は血の注ぎとともになされて来ました。イエス様がここで言われた「わたしの契約」とはどういう契約でしょうか。これは旧約の預言者エレミヤが預言した「新しい契約」を受けたものと考えられます。エレミヤは彼の書 31 章 31～34 節で、主なる神はやがて新しい契約を結んでくださること、その契約を結ぶ者たちの罪を全く赦し、もはやその罪を思い起こさないという祝福に生かしてくださることを約束くださっていました。なぜあの「新しい契約」がイエス様において実現するかと言えば、イエス様が流す血は神の御子の血だからです。旧約時代に罪の赦しのためにはいけにえの血が流されましたが、それらはすべて動物の血でした。それらのいけにえは不完全であって、繰り返しささげられる必要がありました。ヘブル書ははっきりと「雄羊と雄やぎの血は罪を除くことができない」とか「それらは決して罪を除き去ることができません」と言っています。人間と動物ではいのちの重さが違うからです。しかし神は今や私たちの罪を完全に除き去ることができるいけにえを与えてくださいました。それはご自身の一人子イエス・キリストという犠牲です。この神の御子が注がれる血は無限の価値を持つものであり、どんなに罪深い人間の罪をも贖って余りある力を持ちます。また数人だけでなく、多くの人々、無数の人々を救い出す力を持ちます。この「完全に罪を赦す」というかねてから「新しい契約」として約束されていた契約の恵みに生きるように、主はこの聖餐を定めてくださったのです。またエレミヤ書の「新しい契約」では、罪の赦しばかりか、神が律法を私たちの心に置き、私たちが喜んで神の戒めを守り行う者となるようにしてくださるという祝福も約束されていました。私たちは聖餐にあずかることを通して、新しい契約のこの恵みにもより良く生きるように導かれるのです。

イエス様は最後 29 節でこう言われました。「わたしはあなたがたに言います。今から後、わたしの父の御国であなたがたと新しく飲むその日まで、わたしがぶどうの実からできた物を飲むことは決してありません。」 これは二つのことを言っています。一つは弟子たちとこのようにして食事をする機会はないこと、これが最後であるという

ことです。このあと間もなくイエス様は捕らえられ、十字架にかけられ、弟子たちと親しく食事の交わりをすることができなくなります。しかし永久にそうなのではない。もう一つここに言われているのは、やがて御国であなたがたと新しく飲む日が来るということです。この後の十字架を経て、信じる者たちを天の御国へと導き、そこで永遠に祝福された交わりに生きる日が来るということもイエス様は確約しています。聖餐はこのようにやがての天の御国での会食を待ち望み、希望を新たにするためのものとしても定められています。そして彼らは 30 節で賛美の歌を歌ってから、——過越の時に歌われた詩篇 115～118 篇を指していると思われませんが、——オリーブ山へと出て行ったのです。

以上、今日の箇所には私たちが見るのは十字架前夜に聖餐の制定に心砕いてくださった主のお姿です。イエス様はこの後間もなく捕らえられます。そして恐ろしい十字架がその後には待っています。なのにそのことで心が占められるのではなく、むしろこれからご自身がささげる十字架の死の実りが弟子たちの上に豊かに臨むものとなるように、また世々の教会がご自身の十字架の内にあらゆる慰めと祝福を見出すことができるように、この聖餐という礼典を主は定めてくださいました。私たちは主がご自身の死の直前に、これほどに心を注いで制定くださった聖餐を感謝し、これを心から尊んで活用する者へ導かれたいと思います。イエス様はこの聖餐を通して私たちがイエス様の血による完全な罪の赦しに信頼するようにと招いておられます。この御子の身代わりの死という無限の値を持つ犠牲によって、神はこの罪深い者の罪を完全に赦してくださること、そして御国の民として受け入れてくださることを確信する歩みに進むように招いています。そのことをパンと杯をもって私たちの前に目に見えるように示し、鈍い私たちの心によって目覚めさせ、キリストにある恵みに豊かに生きる者となるように招いておられます。今、コロナウイルスのために聖餐式を行うことができない状態が続いていますが、早くにこの状況が抑えられ、再びこの恵みにあずかる日が導かれることを願い、乞い求めたいと思います。そしてこの聖餐にあずかることを通して、一層の悔い改めの生活へと導かれ、また信仰を強められ、キリストが勝ち取ってくださった新しい力に生かされ、やがて御国で食べ、飲む日をいよいよ楽しみに待ち望む信仰の歩みへ導かれて行きたいと思えます。